

花伝書別紙口伝

六

秘する花を知る事

一、秘する花を知ること、
秘すれば花なり、秘せずば
花なるべからずとなり。此
の分け目を知ること、肝要
の花なり。抑一切の事諸
道芸に於いて、その家々に
秘事と申すは、秘するに依

〔口訳〕

「秘する花」を知る事については、「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」といふのがその根本である。この、何が故に秘すれば花であり、秘されば花でないかといふ、その分け目を悟る事が花の肝要事である。一体、あらゆる諸道諸芸に於て、その家々に秘事と称してゐる物のあるのは、それを秘密にしておくことによつて、重大な効用が生ずるものだからである。だから、秘事といふものは、顯はしてしまへば、さう大したものではないのが常である。しかし、その故に、秘事など

りて大用有るが故なり。然
れば、秘事といふ事を、顯
せば、させる事にても無き
ものなり。これを、させる

事にても無しと云ふ人は、
未だ秘事と云ふ事の大用知
らぬが故なり。

先づ、此の花の口伝に於き
ても、たゞ、珍しき花ぞ
と、皆人知るならば、さて
は、珍しき事有るべしと、
思ひ設けたらん見物衆の前
にては、仮令珍しき事を為
るとも、見手の心に珍しき

先づこの花の口伝に於ても、「花と
は、ただ、珍らしいことである」とい
ふことを、誰人も承知して居るならば、
「さては、何か、珍らしい事を演ずる
であらう」といふ予期を見物人が持つ
こととなり、さうした見物の前では、
たとひ珍らしい事を演じても、見物
の心には、珍らしいとか、意外だとか
いふ感じは起るものではない。見物人
にとつて、花だといふ事がわからない
のが、演者の花になるのである。だか
ら、見物人は、ただ思の外に面白い上
手だとばかり感じて、それが花である

といふものは、大したものではないの
だと言ふ人があれば、その人は、未だ
秘事といふものの大なる効用を知らな
いが為であるといふべきである。

感は有るべからず。見る人の為、花ぞとも知らでこそ、為手の花には成るべけ

れ。されば、見る人は、たゞ思いの外に、面白き上手とばかり見て、これは、花

ぞとも知らぬが為手の花な

り。さるほどに、人の心に、思いも寄らぬ感を催す手立て、これ花なり。

例へば、弓矢の道の手立て

にも、名将の案計らいにて、思いの外なる手立てに、強敵にも勝つ事あり。是負く

のだといふことさへも知らないで居る。従つて、結局、見物人の心に、思ひもよらぬ感激を催さしめるやうの手段が、能の花であるのである。

例へば、武道方面のはかりごとに於ても、名将の智謀によつて、意想外の策略をめぐらして強敵にも打勝つ事がある。これも、敗れた方から見れば、敵のめづらしい（意外な）やり方に化かされて、敗られたのでなくて何であらう。そして、これこそ、一切の諸道

る方の目には、珍しき理にてはあらずや。これ一切の事、諸道芸に於いて、勝負に勝つ理なり。かやうの手立ても、事落居して、かゝる計り事よと知りぬれば、其の後は容易けれども、未だ知らざりつる故に負くるなり。去る程に、秘事とて、一つをば我が家に遺すなり。是を以て知るべし。たとへ、顯さずとも、かゝる秘事を知れる人よとも、人

芸に於て、勝負に勝を得る根本原理であるのだ。かやうな方術も、其の事が落居した後に、かうした謀であつたのだと知つてしまへば、其後は（これを防ぐことは）容易であるけれども、以前には、未だ知らなかつたために敗れたのである。かやうなわけであるから、秘事として決して人に知らせないものを、一つは、我が家に遺し伝へるのである。

尚、以上の事からして、次の事についてもわきまへねばならない。それは、たとひ秘事を秘しかくして他人に知られる事がないとしても、（それだけで不十分であつて）、左様な秘事を知

には知られまじきなり。人

に心こころを知しられぬれば、敵人てきじん

油断ゆだんせずして、用心ようじんを持もて

ば、却かゑて敵かたきに心こころを付つくる相さう

なり。敵方用心てきはうようじんをせぬとき

は、此方こなたの勝かつ事こと猶容易やすか

るべし。人に油断ゆだんをさせて、

勝かつ事をことを得うるは、珍めづらしき

理ことわりの大用たいようなるにてはあらず

や。去さる程ほどに、我わが家のいへ秘ひ

事じとて、人に知しらせぬを以もて、生涯しやうがいの主ぬしになる花はなとす。

秘ひすれば花はな、秘ひせねば花はなな

るべからず。

つてゐる者であるといふ事すらも、他人には知られてはならないのである。

他人に、彼は秘事を知る人間だと知られてしまふと、敵の心に油断がなく、用心を持つやうになり、さうなれば却つて敵に気を附けさせるといふ結果となる。敵方が用心しないで油断してゐる時は、此方の勝つことは極めて容易であらう。敵人に油断をさせて勝を得るといふことは、これ珍しさの理（秘すること）の大なる効用であるではないか。かやうの次第であるから、我家の秘事として、他人に知られないやう

にすることを以て、生涯散らぬ花の主となる根本とするのである。秘すれば花であり、秘せなければ花ではあり得ない。

この段は、秘事といふものの性質・効用等を説いて余す所がない。我が諸道芸に於て、秘事や秘伝について記したものは相当に夥しいが、秘事の意義をかくまで正確明瞭に道破したものは、私はまだ見た事がない。それほどに、此の段は立派な意見である。

秘伝や秘事は、知つて見れば、何でもないものである。その点も世阿弥は明かに認識してゐて、「秘事といふことをあらはせば、させることにてもなきものなり」と断言して居る。しかし、その故に、「秘事などはつまらないものだ」といふのは、所謂一を知つて二を知らざる者である。即ち、世阿弥をしていはしむれば、かかる者は、秘事の偉大な効用といふものを認識し得ない浅見者流に過ぎない。秘事は秘することによつてのみその効力を發揮するものであるからである。

何が故に秘する事が大用を生ずるのか。世阿弥は戦場に於ける武将の神謀奇策を以てこれを例証してゐる。敵を打つには謀の密なることを要する。こちらの謀事が敵に知られるならば、敵はこれに対応する

処置に出でるからである。敵の不意を打ち敵の油断を突く所に、勝利の秘策がある。敗れた者が、戦争の終つた後に、敵の謀事を考へれば、大したものでなかつた事はわかるであらうが、それを予知しなかつた所に、敗因がある。この敵をして予知だもさせないでその不意をつくのは、全く「秘する」といふ事がその効を奏したものでなくて何であらう。

能の花に於ても同様である。「花は珍しさである」といふのが秘事である。だが、見物にこれを知られては、見物が何か珍しさのある事を予想する。予想した者の前では、たとへ如何に珍らしく演じても、見る

者は「意外な」といふおどろきを感じない。従つて「珍らしさ」が珍らしくなくなり、花は咲かない。所が、見物が、花とも珍らしいとも何とも知らないで、ただその面白さばかりに気をとられて、「珍しさが花だ」と気づかぬ所では、真に能の花が咲く。「人の心に思ひもよらぬ感を催す手立」が花である。「思ひもよらぬ」ことは、秘することによつて生れる大なる効力である。

更に世阿弥は進んで、秘事を知らせぬだけでは未だ不十分であるといひ、秘事を持つ人間であるといふ事さへも、他人に知られてはならない

と説く。実際に用意周到の言である。敵人をして、名将であり謀士であると思はせるものは、未だ真の名将謀士ではない。如何となれば、それでは敵が油断をしないからである。真の名将謀士は敵に油断させ得る士でなくてはならない。能に於ても同様である。見物を油断させる人間でなくては、眞の花を体得した者とはいへない。「思の外なる感を催させる」とは、結局、相手に油断させて、その虚を衝く所からのみ生れるからである。